

伝えることは生きること

— ある在日朝鮮人宗教家の“人生の執筆”という表現手段から —

渡邊徳子*

本が生まれたところ

日本に住む者ならば、誰もが知っている霊峰のふもとに、“その人”の寺院——日本と朝鮮半島北部の霊峰を各々の山号とした「〇〇山△寺△△山〇教会」——はある。

そこは緩やかな坂をすすみ、霊峰を望める民家が集まるところから一気に急坂を、高さにして200メートル弱は登りきった、杉山を一部開墾したところに建っている。

真冬の早朝には零下を切ることも多く、大型の丸いストーブを点けてもなかなか温まらない。「ここあがってくる途中では気圧が変わるのがわかるのよ。下がると暑くなってく寺院では着ていた上着を脱ぐこともありますよ」と、寺母さんは市街地の人と話していることがある。

また季節によっては、特に急坂の辺りで、数十センチ先さえ見えないほどの——雲の中と違ってしまっても大げさではないような——濃い霧に包まれてしまうこともある。

十字架が掲げられ、さらには「第一本尊」として「釈迦、イエス・キリスト、老子、孔子」が祀られている本堂に食堂兼居間という寺院の中枢を担う建物と、寺院の最も奥にある、朝鮮半島の民間信仰にも結びつく「山神閣」以外は、全てプレハブ棟から成っており、“荘厳”という表現からは縁遠い、どちらかといえば質素な造りの寺院である。

ここは“清い僧”と書いて「清僧」と呼ばれる人たち、すなわち“知的障害者”を出家させ、その姿に学び、互いに助け合いながら生きることが掲げている小さな「共同体」であり、現在は清僧3人、学僧1人、寺母、“その人”こと「M管長」の、合わせて6人から成っている¹⁾。

寺院の最盛期には清僧を今の倍以上もかかえ、また“清僧たちから学ぶ僧”という意味から「学僧」と呼ばれる一般僧たちも同じように倍以上かかえていた。

その人は無類の読書家で、檀家を持たないゆえに日々の托鉢と寄付等から賄っている生計の一部は、毎月の本代としても使われていく。

各々のプレハブ棟には——達者な毛筆にて名前が書かれた——木札が掛けられ、その人の朝鮮半島出身としての、宗教家としての、“願い”が込められているのが読み取れる²⁾。

うち二棟は“図書室”とも呼べそうな建物で、山神閣の斜め前、さながら小さな小学校の図書室を彷彿させる広さの「△△山学・道・研究所」の中には、スチール製の本棚が規則的な幅で幾つも並べられ、隙間無く本が詰め込まれているのがうかがえる。

もう一棟は本堂に面する——夏から秋にかけては真っ白なムクゲの花が咲く——庭に建つ、「一日中、日も当たるし〈冬には〉一番いい部屋よ」とも言われる「△△山 祖国統一研究室、△

* 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

寺 神学体得実践研究所」、通称「小さな図書館」である。そこは書齋兼客間としても使われ、壁面には天井まで届く本棚が並べられ、机の上には時事雑誌などが山のように積まれている。

年を取って体が弱くなり、弟子達のみで托鉢に出かけさせている現在、その部屋の机に向かい背中を丸めて本を読む姿を、食堂兼居間のテーブルにA4版大学ノートを広げ、何日か分に渡ってためた——数紙は併読している——新聞雑誌の記事を切り貼りしつつ、流れてきたテレビ番組にちらりと目を向けるような姿を、しばしば見かけることができる。

そんな環境の中で、その人の筆からなる「自分史」——人生の執筆——とも呼べそうな6冊の本³のうち、少なくとも2冊が生まれている。

繰り返された“その人”の人生解釈

これら6冊は全て日本語で書かれたものである。また、“釈迦の教えを広げるモトとなりなさい”という意味が込められた、韓国の禅寺にて出家したときの法名を著者名としている⁴。

①冊目（1977年12月出版）〈表1・①〉参照

その人は1977年、東京の仏教系大学での勉強を終え、府中のアパートを庵とした頃に、初めてその人生を振り返っている⁵。

・朝鮮半島北部の霊峰「△△山」の麓で、父は自分を宿す母と長男を残し、行李に医学書を詰めて山籠り。約3年後、1922年の夏に港町で自分は生まれた⁶。父はソウルで免許取得、故郷で漢方医に。祖父に千字文を教わる不自由無き日々。1928年に普通学校入学。父の酔狂からか「11歳で18歳の妻と結婚」。恋しい母と添い寝もできず、日本人の校長からは幼い結婚を嘲笑され、嫁や父を憎む日々…その人は当時を「少年時代」として振り返っている。

・家出を覚え14歳で「一人満州へ」。そこで中学1年を終え「東京へ」⁷。父がしぶしぶ認めた日本行きの条件だった鉄道学校入学を破り、仕送り途絶え、朝鮮語訛りで苦勞しつつも新聞配達で工面。日本人との淡い初恋も「あちらの人…」と言われ、失恋。就職したが飽き足らず転勤希望、「再び満州へ」。別の会社に勤め「蒙古人の部落」を物見遊山。日本軍将校に軍医職を勧められ再び東京へ。しかし東京大空襲から朝鮮の故郷へ。故郷では兵士召集が始まっており家族の勧めで再び満州へ…その人は当時を「故郷をあとに」と振り返っている。

・満州では「ソ連の侵攻・満州開拓団の悲惨」な姿と共に再び南下。故郷に着くも両親の勧めでさらに南下、永遠の別れとなる。「国境の鉄橋」を越え、“南”でハサミ売りをしつつ図書館学校へ。卒業後は中学高校の教師に。ある時は日本密航を考え島に赴任するも機会無く「体中から夢が消えうせ」辞表提出。当ても無く飛び出し無一文、「自殺未遂」。しかし「旦那様あ、十銭めぐんでください！」と「片腕、両足のないイザリ」に服を引っ張られ、自分には「手も足もある」と気付き、生気を取り戻した。その後、朝鮮「動乱勃発」。「義勇軍に参加」し、両親の“北”と戦うが「敗走」。父の死を知る。混乱の中、クリスチャンの「難民の女」と出会い、自らの意志で「結婚」。夫婦で教師となり平凡に暮らした…そんな日々を、その人は「日本の敗戦・韓国動乱」という出来事の中で振り返っている。

・やがて夜間大学にて政治学を専攻。卒業後は家族を残し「台湾留学」、「全島講演行脚」の日々。さらには「41歳の東大大学院生」に。政治学を極めるはずが、夢の亡父に「お前の立つ場所を知らないのか」と怒られ、神とは靈魂とは？と宗教に目覚め、日本の新宗教を研究。その頃「Cという男」と知り合い、「真っ白な便箋」にサインを迫られたり、西ドイツへの観光を勧められるのを断った頃、警視庁から出頭命令。Cは「在欧の韓国人を東ドイツ経由で北朝鮮の平壤に送るパイプ」すなわち国家犯罪に関わる人物だったと知る。そうして失意のうちに日本を発った…この当時を、その人は「留学」時代として振り返っている。

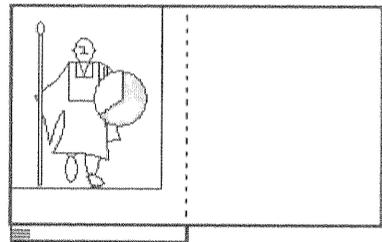
・韓国ではKCIAの追及と失業が待っており、家族の為にも「おでん屋開業」。人の優しさ冷たさを知る。その後、友人の力添えて大学の研究部長に。週末ごとにソウル郊外の禅寺に通っていると、政治家にも通じる禅師に「文部大臣にならないか…」と誘われた。家族も喜び、条件としての「五体投地の行」に入るが、政治欲を失い「出家」となった。戒律に従い家族を捨て、涙の別れで「山の禅寺」へ。しかし、年下の兄弟子達に苛められる「非常識の世界」に耐え切れず「遁走」。別の寺院にて布教に務めるが、いつしか韓国仏教界へ絶望。「日本での求道」となった…その人は、これら一連の過程を「出家」として振り返り、さらにはそれまでの人生を大きく「放浪の軌跡」と位置づけている。

・そして東大時代の「新宗教教団巡り」、出家後の来日での約1ヶ月間の「インド一人旅」、1年半に渡る「刑務所訪問記」や、犯罪者に名を連ねる在日韓国人たちに悲哀を寄せたもの、さらには△寺院建立への抱負など…を、大きく「光を求めて」と括っている。

さらに、その人は「放浪の終り、私の懺悔」の中で、その人生を3つに分けている。第1期は、強制結婚を期に放浪、ソ満国境で終戦を迎えた「広い世界への憧憬的旅の時期」とし、第2期は、祖国解放もつかの間、親兄弟と別れやむなく故郷捨て、越南後の韓国動乱を経て教員生活、そして東大留学までの「祖国は引き裂かれ故郷を失ったが、それでも結婚と教員生活の比較的平和な時期」とし、第3期は、出家から今日までの「私にとって最も大きな転換」の時期としている。

その人は、本の題名に“韓国・日本を40年も放浪してきました。それは一韓国禅僧としての「思想遍歴」でした”といったものを付けた⁸。

青いハードカバーを開き、中扉をめくると、その人の堂々たる“托鉢姿”が現れる⁹。



②冊目（1983年12月出版）〈表1 - ②〉参照

その人は1983年、茅葺農家を改築した寺院にて、清僧・学僧・そして日本で出会った新しい家族に囲まれる中、その人生を再び振り返っている。この頃、その人は“知的障害者”を僧として迎える寺院の管長として、宗教界やマスコミから多くの注目を受け始めていた。

・霊峰△△山の麓で、母と乳呑み児の長男を残し¹⁰、「父の修業」は行われた。修業中には、「深

夜の虎」が尻尾で板戸を叩いて邪魔するのを「万物の霊長、人間が修業しているのに、何の用だ！！」と追い返したというような不思議な逸話がいくつかあった。1922年、親子で港町に出た夏に自分は生まれた。厳しい「老祖父」から千字文を教わる日々。それはオンドル部屋で、母による父の修業話や、祖母が幼い頃に不思議な経緯で手に入れた家宝の宝石の話など、昔話を聞かされる日々でもあった。1928年、7歳で普通学校入学。教室の後には日本語を覚える為に入學した「17、8歳の小学生たち」も座り、安重根の伊藤博文暗殺の授業では、「アジョッタ（あ、よかった）！」と朝鮮語が飛び交い、日本人教師が俯くこともあった。そして「11歳で結婚」。寒さで凍えつつ馬で嫁を迎え、なぞなぞ遊びをした「幼い初夜」。母との添い寝も叶わず、校長からの嘲笑などが「悲哀…家出への思い」となり、単身「満州へ」。そこで朝鮮語での教育を受けつつも、恩師からは“全ての中心・東京”行きを勧められた…そんな日々を、その人は「第一章 故郷」として振り返っている。それは①にて、「少年時代」・「故郷をあとに」前半部分として位置づけたものに、新たな話を加えより豊かな形で振り返るものでもあった。

・①にて「故郷をあとに」後半部分・「日本の敗戦・韓国動乱」前半部分として括っている、単身で東京進学・就職、満州を物見遊山し、再び東京へ上京するが、戦況悪化で朝鮮の故郷に満州を流浪する日々や、満州開拓団の哀れな姿と共に再び南下し教師となるも、一文無しで自殺しかけたのを「イザリ」に救われ、生気を取り戻した日々…を①とほぼ同じ文章で綴り¹¹、①の具体的な“括り方”とは違う、より抽象的な「第二章 放浪」として括り直している。

・①にて「日本の敗戦・韓国動乱」後半部分・「留学」として振り返っている、動乱の最中に知り合った「難民の女」と「結婚」、教師として平凡な日々を過ごし、夜間大学に入学、台湾・東大と留学し、宗教に目覚めたものの「Cという男」と出会ってしまったこと…を①と全く同じ文章で綴り、動乱後の平凡な生活も含めて「第三章 動乱」と、大まかに括っている。

・①において「出家」として括った、東大留学から帰ると「KCIA」の追求と失業で「オデン屋開業」。政治欲から修行に入ったものの「出家」。韓国仏教界に絶望し「日本での修行」…という過程については、①とほぼ同じ文章で綴り、さらには①と同じ“括り方”である「第四章 出家」として振り返っている。

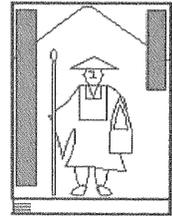
そうして、①に若干の加筆修正を加えるだけで“誕生から出家まで”を、“括り方”のみを若干変えつつ綴り切った後、その後の6年間（①出版から1983年の②出版当時まで）を振り返る、“書き下ろし”の章に入っている。

・東京の仏教系大学で勉強をしつつ庵で過ごす中、宗教を求めドヤ街や福祉施設を周り、「精薄の人達をご本尊にしなされ」という言葉に出会い¹²、△寺院建立に奔走した日々を、また宗教的伴侶となる日本人女性Gとの「結魂」（結婚）までの過程について…その人は「第五章 光を求めて」として括っている¹³。

・やっとの思いで「△寺院」建立、長子も誕生。「第二本尊」として「精薄僧たち」を迎える日々。自分との結婚に無理解なGの親類との溝を、朝鮮半島の休戦ラインに見立てた「妻Gの38度線」。韓国で出家の際に別れた前妻からの和解の手紙への「感謝の涙」。現在の△寺院に移転

する前の地鎮祭における不思議な出来事などを…その人は△寺院から望める○○山麓や、そこから得られる思想にちなみ「第六章 ○○山麓」として括っている。

その人は本の題名に、「オデン屋開業」の際に“ゼロから出直そう”といった気概からも名付けた“屋号”を付けた。それは“純粋な飾らぬ心で「青春」を追い求めていきます・きました！”とも受け取れるもので、同時に“裸一貫のオデン屋から第二の人生（宗教的生活）は始まった！”という意識も読み取れる。表紙には日本の霊峰○○山を背景に“托鉢姿”で佇む姿が写っている。



また、その帯には「長き放浪と求道の末に得たものは何か！○○山麓の寺、超宗派精薄寺院・△寺建立に至る波乱万丈の人生放浪と修行の旅」と記されている¹⁴。

③冊目（1984年5月出版）（表1 - ③）参照）

その人は、②出版の約半年後、同じ茅葺寺院にて“書き下ろし”の③冊目を世に出した。

・まず「序章 精薄寺院とは何か」では、全ての宗派を否定、「弱者と共に生きる」「型示しの寺」が“△寺院のあり方”（すなわち教義）であると説いている。

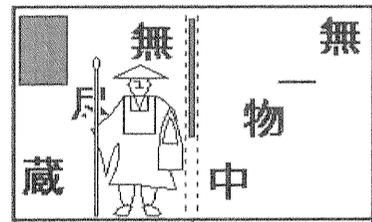
・「第一章「知恵」の教育」では、「教師」・「ソーシャルワーカー（主に講演活動）」・「僧侶」の経験から見ると、釈迦のいう「四苦八苦」から離れた、精神的な悩みを現代人は多く抱え込み、それは学校教育が「知識」に偏って「知恵」を教えていないこととも結びついているとした。

・「第二章 真の連帯」では、聖フランシスコや内村鑑三といった宗教家の逸話を挙げ、「大自由人の道」について考え、さらには酒豪の自分が韓国の出家生活では酒肉を避けてきたのに、東京では「托鉢の帰りに僧衣のまま立飲屋に立」った理由を、「伝統仏教とくに戒律仏教教団の中の僧侶の裏面生活」を知るため「ありのままに虚飾のない生き方」をしたかったからとした。そして托鉢のお金を数える愉快さは「社会連帯性、世界の連帯性がこの〈頭陀〉袋の中にある」気がするということからも来ていると、その行動や気持ちを“教え”と結び付けている¹⁵。

・「第三章 あたりまえに生きる」の中では、①②での「自殺未遂」の一節を引用し、自分の人生は「ドンデン返しの論理」により「変わったといえるかも」とし、人としての財産（目鼻手足）を最大限に活用することが、生きる活力にもつながっていくと説いている。

・そして弱者の中に仏を求め、あちらこちらを彷徨ったことを「第四章 ドヤ街の人生」、「第五章 志願囚人をめざす」、「第六章 共同体を訪ねて」と、各々独立した章として述べている。これらは、①②において「光を求めて」として括った部分と素地は共通している。

・「第七章 △寺の誕生」では、寺母（妻）Gや短期修行者、寺院を支える人々について触れ、それは「清僧第一号」Pの入山と“人々を彼岸に渡す橋となれ”という願いの法名などについて触れた「第八章 P君との出会



い」となり、「我が生活を正す鏡」として“知的障害者”の「存在意義」を捉えようとする「終章 神は知者を導くために」へとつながっていく。

これらの章では、それまでの自己の経験や思想を述べる部分では用いてこなかった、“△寺にまつわる新聞雑誌の記事”や“支援者の手紙・言葉”さらには“妻Gの日記”、つまりは“外からの視線”を狭み込む（引用する）ことで、その宗教活動を、“外から認められたもの、社会から必要とされているもの”として位置付けている。

・そして、「増補「△寺」修遠院建設へ」や「結語・私の悲願と終生誓願」へとつながっていく。

その人は本の題名に“精薄の子らを「第二本尊」として迎える「△寺院の建立」は、自分にとって「悲願」でありました」といった内容のものを付け、表紙には「無一物中無尺蔵」と、これまで・これからの人生を支えていく格言を散らし、そこに“托鉢姿”を配している。

また、その帯には「ある新聞に“精薄寺院建立を決意した”と紹介された著者は、托鉢と支援者の布施、それに著者の講演料と本の売上げで一切をまかなっている。精薄寺院建立をめざしてから10年、その完成を記念して本書を贈る。」と記されている。

④冊目（1987年5月出版）〈表1・④〉参照

1987年、その人は出版社と協力する形で、④冊目の本を出版した。茅葺寺院から移転した（冒頭の）△寺に於ける“聞き書き”が元となっており¹⁶、それまでの①②③とは異なる“語り口調”となっている。目次の後には「本書は、1986年11月19日、20日の2日間にわたって、〇〇山・△寺で行われた著者の談話をまとめたものです」と記されている。

中扉を開くと、1985年に△寺の山神閣に勧請した“〇〇山と△△山を合体させた、おそらく（思想としては）世界に一つしかない”という色鮮やかな山神（絵）が姿を現す。

・人生で「六つの名前」（幼名、成人名、日本風の通称名、クリスチャン名、法名、号）を使った自分は、欲を持った者は入れないと幼い頃に言い聞かされた霊山△△山の谷で修業した父のもとに生まれ、その麓で育ったと語り、さらには「母なる〇〇山、父なる△△山」は元々、双子の神様（山）だったので？と“霊的な独自の見方”を示している…その人の故郷であり、宗教家になった原点と意識され、朝鮮の建国神話の舞台ともされる△△山を下地に、幼少期と思想が示される話は、「I 神壇樹の下に」として括られている。

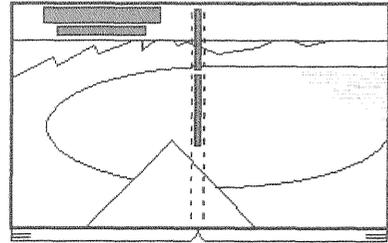
・東大留学の際に亡父に夢で諭される「最初の神秘体験」をし、出家へとつながる過程や、老師から学んだことなどが語られる部分は、「II 神秘への出発」として括られている。

・そして“文化政治”下での民族抹殺政策や「韓国朝鮮の固有の宗教を破壊」した日本の侵略戦争に対する批難が示され、同時にそんな時代にも分け隔てない目で見ようとした日本人宗教家がいたという熱い語りの部分は、「III 日韓の魂を呼び起こす」として括られた。

・「なぜ日本の精神薄弱のために尽くすのか」という韓国人からの疑問について、“恨みを恨みで返してはならない”と語り、「精薄者が人生の新しい意義を教えてくれる」という“△寺の教義”について語ったものは「IV 今、なぜ△寺なのか」として括られた。

・そして、山神閣でも唱える「山王経の中には世界連邦の思想がある」とし、“21世紀を迎える今こそ、北東アジアは一つの共同体となるべきだ”と、さらには“また一つとなるだろう”と予言する部分は、「V 一つの世界、一つの夢」と名付けられている。

本の題名は、その人の思想の原点ともなる朝鮮半島の霊山と山神閣の絵に基づく“△△山曼荼羅”と名付けられ、表紙には△△山頂の湖が広がる。



また帯には「ワンワールド、ワンドリーム 地球浄土への道しるべ 韓民族の聖地△△山の霊気を受けて育った異色の韓国禅僧が語る深い魂の世界。人間存在の神秘に根ざしながら、21世紀の地球を予言する。」と記されている。

⑤冊目（2000年11月出版）〈表1 - ⑤〉参照

その人は2000年、13年振りに⑤冊目となる本を出版した。それは〇〇山麓の△寺で書かれたものではなく、九州地方の小さな教会の一室で書かれたものだった。④では還暦も半ば過ぎだったその人も、このときは喜寿を迎えるか迎えないかの歳となっていた。

・「第一章 △△山の麓での幼少年期から中学生時代まで」では、「祖母から賛美歌を祖父からは千字文」を教わった幼少期や、1932年12月19日に年上の嫁と「10歳で強制結婚」し、家出、満州・日本と過ごした中学生時代を鮮明な描写で綴っている。

④までは、村の書堂^{ソクダン}で漢文等を教える祖父から千字文を叩き込まれたこと、祖母が拾った不思議な宝石（家宝）の話などは出てきたが、“祖母が熱心な信者としてキリスト教会に通い、寢床では賛美歌を教えてくれた”という話は、この⑤で初めて綴られた。

・「第二章 波乱の放浪 絶望から歓喜へ」では、満州を物見遊山し“南”に落ち着き、自殺未遂。しかし「イザリの乞食の霊力」によって生きる気力を取り戻したと綴っている。

・そして、これまでに「動乱」・「留学」・「出家」前半部分として括ってきたものを、より鮮明にその光景を思い浮かべられるような文章で綴り直し、「第三章 朝鮮動乱の中で」、「第四章 留学生時代「国家顛覆罪」の罪名をさせられて」、「第五章 修行の中で得たものは」とした。

さらに①②では「おでん屋開業」と括ってきた節を、この⑤では「オデン道場」という言葉に括り直しており、はっきりと“出家に結びつく出来事”として位置付けている。

・この後は「第六章 佛道の中で 大自由人W老師」、「第七章 知的障害者との出会いと△寺修道院」として、これまでの本でも触れてきた、“出家後の来日から始まり仏を求め歩いた日々”が綴られ、ある知的障害者の「花が笑っているよ」という感性に驚いたことが¹⁷、△寺院建立へとつながったと、仏教僧としての道程を振り返っている。

・そして、僧侶として④を出した2年後の1989年1月、「△寺分院」の世界への建立を目指し、ニューヨークに渡航したところ、朝の勤行中に「Mや 何してるの、一緒に賛美歌を歌おう。」

と亡き祖母が現れたことで、“洋の東西の思想を併せ持つ「両眼具備」の者”となるべく、神学校へ進んだことや、途中で学費に困った際「本当の牧師になります！！」と言うと、そうかと工面してくれた“禪師”の“仏教だけにとらわれない広い世界観”について綴る「第八章 キリスト道に導かれて ニューヨーク時代 日本のある禪師の宇宙的愛」へと移っていく。

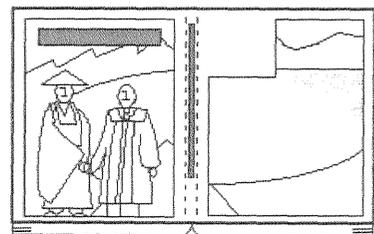
・「第九章 無者キリストに生きる天弓先生と托鉢精神」は、帰国後“僧侶であり牧師であること”¹⁸を模索した頃、ある牧師の本に感銘し訪ね励まされたことや、仏教とキリスト教の類似点を「托鉢精神」から分析し、両者とも真理は一つであると綴ったものとなっている。

・その後、東京・西日本を経て九州に落ち着くまでを「移動宣託所」と理解。九州の自宅兼教会ではNHKの番組に心打たれ38度線の町を訪問、「純悪質の家」という食堂の女性主人に宗教にも通じる精神をみて感銘したこと。2006年6月の南北首脳会談に感激し、民団と朝鮮総連の支部長を教会に呼び寄せ、祝賀会を開いた様子などを、「第十章 38度線へ南北統一の夜明け前」として綴っている。

・また「別章 韓国の大思想家 多夕柳永模」として、全ての宗教は同じ道（神）に辿り着くという柳永模の思想を紹介し、語録を収録している。そして、第一本尊として「釈迦、イエス・キリスト、老師、孔子」を掲げたことは間違いではなかったと自信を得られたのを綴っている。

その人は「あとがき」で、“幼少時代から△寺建立までを抜粋、加筆修正して加えた理由”を「日本帝国主義の支配下にあった朝鮮半島で過ごした幼年、少年時代。十歳で結婚させられ、母から無理矢理に別離させられた少年時代。38度線に分断され、父母兄弟と生き別れて、故郷を失った青年時代。弱者として、差別された民族として宗教に導かれていったことなどを抜きにして」今の人生は語れないからと綴っている¹⁹。

本の題名は“韓国・日本を「求道放浪」し60年、僧侶であり牧師になります”といったもので、表紙には④でも示された霊峰の湖を背景に、“僧侶姿”と“牧師姿”のその人が握手をするという、“合成写真”を駆使したものとなっている。



帯には「排他的な戦いの時は終り今や世界は和解と融合の時代に向かっている。放浪の中でたどりついた21世紀の思想、雲水牧師が語る「両眼具備」の世界とは！」と記されている。

⑥冊目（2004年8月15日出版）〈表1 - ⑥〉参照

その人は2004年、前作の出版から4年後に⑥冊目を出している。それは1989年に〇〇山△寺を飛び出して14年、2002年に再び冒頭の△寺に戻って2年経った頃のものである。

この本は6つの章と終章から成るが、大まかには四つに分けられるといえるかもしれない。
・一つは、幼少期を振り返り、またキリスト教にも辿り着くまでのことを、思想と共に綴った「第1章 38度線に行く」。それから家族と生き別れとなった朝鮮戦争での、当時の妻²⁰と自分の

体験談を綴った「第2章 私にとっての38度線・忘却を許さぬ歴史」。

・二つは、教会にて民団と朝鮮総連の支部長を引き合わせたが切っ掛けとなり、「2000年、帰郷」となったことと、それまでの本でも触れてきた終戦前後の流浪について、簡潔に綴り直した「1945年、故郷脱出」とを織り交ぜて綴ると同時に、56年ぶりの弟妹との再会を綴った「第3章 56年ぶりの祖国」、「第4章 わが弟妹たちとの抱擁」。

・三つは、これまでに掲載してきた“ドヤ街や刑務所さらには福祉施設に仏を求めた”ことを加筆修正して綴り²¹、さらには再び△寺に戻ってからの清僧たちとの生活を、現在の寺母が綴った「清僧日誌・鈍行列車の哲人たち」²²を掲載し、“△寺の経緯”と“現在の寺院生活”を「第6章 弱者とともに生きた人生」と括ったもの。

・四つは、⑤における「第九章 無者キリストに生きる天弓先生と托鉢精神」や「別章 韓国の大思想家 多夕柳永模」にも通じてくる、「第6章 平伏し無になって生きた人たち」。

・最後は、善意で韓国38度線付近の土地を贈られ、近いうちに日本の〇〇山麓から、△寺〇教会を移転することになったと告げた「終章 38度線が呼んでいる」で締め括っている²³。

本の題名は、終章に従って“自分の魂を38度線に埋めよう”といった内容のものが付けられている。赤い表紙が印象的で、「M管長プロフィール」と共に、寺母と一緒に写っているその人の表情は、歳のせいもあるのだろうか、これまでの写真の中で最も柔和なものに見える。

帯には「北東アジアに平和を！「南」「北」を結ぶ列車よ走れ！その日に向けて、私は海峡を渡ろう。慟哭の現代史を心に刻んだ在日韓国人牧師が、いま、語る！」と記されている。

各本を“群”としても捉える

先の①～⑥の中で、“その人自身”が“その時々”で定めた“その生き様”を「年譜」にすると、おおよそ²⁴〈表2〉のようなものが出来上がる。

しかし、年譜で示したものは、その人が誕生と同時に予想していたものではない。もちろん、本も初めから“6冊もの（シリーズ）”を書こうとしていた訳ではなく、その人自身気付けば——1977年から2004年までの27年間に——“綴ってしまっていたもの”ともいえるだろう²⁵。

そしてこの6冊は、その人が自分なりに整理した人生の記録であると同時に、その人の“宗教思想（教義）”が揺るぎないものへとなっていく構築過程としてもみることができる。

つまり6冊は、各々の時点での人生解釈という“独立したもの”、と捉えることができる一方で、気付けば出来上がっていた…という形の“6冊もの”として、その人の意識や環境の変化を読み取れる“群”としても捉えることができる。

〈表1〉の①～⑥を構成する「章」・「節」をみていくと、先に一応“「自分史」と呼べそうな”とした6冊の、“性質”の変化——各本での要点の移り変わり——が見えてくる。

①②は“朝鮮生まれの自分が僧侶として日本の障害者と生きることになった経緯”を自分自身で確認していく——納得させる——ために綴った²⁶最も「自分史」らしいものといえる。

③④は、先の①②で定めた人生、すなわち経験に基づいた“宗教思想”を確固たるものとし

て——紙に落とすという方法で——“表明”した一種の「教本」に近いものといえる²⁷。

⑤は、その人自身も予想していなかった“僧侶だけではなく牧師をも兼ねることになった経緯”、すなわち③④において堅固なものとしたはずの“思想”、さらには①②で定めたはずの“人生＝生き方”の、“転換”を綴った“再構築し直した「自分史」”ともいえる。

それは⑤「はじめに」の中で、「私はやっとな住の地〈△寺〉を捜したかにみえたが、神は私を放ってはおかれな」かったと綴っている部分にもあらわれている。

⑥は、⑤にて表明した“僧侶兼牧師”という生き方を示した上で、これまた予想もしていなかった“故郷への帰郷”や“再び戻ることができた——戻ることとなった？——△寺での暮らし”を、故郷への“具体的な「紀行文」”を主軸に、その人生そのものをも“大きな旅路”として捉えようとする“ある種の「紀行文」”といえる²⁸。

最後の本が書き上げられてから数年経った現在、私がある人から聞かされる“教え”は、①～⑥のいずれかのものではなく、それらが統合され、さらには——2004年から2007年までの、この3年間分で得た——新たな“見方”が加わったものとなっている²⁹。

“他者”から見た“その人の人生解釈”

そして私は、何者でもなかったはずの“その人”が、本を執筆するという行為——自らを宗教家として捉えていこうとした“試み”、すなわち人生の位置付け・振り返り方——の中で生みだした“記述”を、書かれなかったことも含めて、〈表2-※ii区分〉で示したA～Zのように区切ることで、“人が自らを振り返る”ことに伴うものを把握しようと試みる。

その人生は、この“私”という“他者”を通すと、次のようなものに見えてくる。

A：管長誕生前後（幼少期）から早婚の苦悩の日々。→B：満州・日本への家出から自立の日々、また日本においては楽しくも辛酸を舐めた日々。→C：満州での物見遊山とともれる日々。→D：敗戦と混乱の中での逃避行の日々。→E：南での生活基盤を固めていった日々。→F：絶望と歓喜を知った日々。→G：動乱の日々。→H：自らの意思がある結婚と仕事で充実した日々。→I：留学で刺激を受けた日々。→J：留学先にて宗教を求めることになった日々。→K：身の危険が迫った日々。→L：出家につながる日々。→M：韓国にて出家し修行の日々。→N：日本での修行の日々。→O：アパートを庵とし自らの意思で宗教を求めた日々。→P：庵に住みつつ、人々と出会い（宗教的伴侶も含む）交流する日々。→Q：△寺の準備期間と宗教的伴侶との結婚で充実した日々。→R：△寺の基盤となる入山を果たした時期。→S：弟子の入山がはじまった△寺の草創期・またマスコミにより時の人となった時期。→T：△寺の発展期・安定期。（…Q～Tは「マスコミから多くの取材を受けた時期」でもある。）→U：△寺の混乱期。→V：さらなる思想を求めた日々。（Vはまた、引き続き△寺では混乱を極めている「U」の時期とも重なる。）→W：△寺に戻れない受難の時期。→X：南北統一への希望の日々。→Y：念願の帰郷が叶いますます希望を持つ日々。（…V後半～Yは「△寺院では住職代理による学僧中心の活動期」でもある。）→Z：△寺に再び戻った時期（再び管長が△寺院を率いることに）。

このA～Zは〈表1〉の「※」とも共通するのだが、それらが各本の中でどのくらいの比重を占めているのかをあらわしたのが、〈表3〉である。

すると、6冊中全てにおいて、(各本での比重はともあれ)必ず「O：アパートを庵とし自らの意思で宗教を求めた日々」が綴られているのが見えてくる。

それは、これら6冊は全て“宗教家として日本に生きるようになってから書かれたもの”であり、ゆえに“日本における「求道」の日々”が、全ての本——自らの定めた人生——における一貫した要点となっていることを示している。

さらには、全てで取り上げられたものではないが、6冊中5冊で述べられている「A：管長誕生前後(幼少期)から早婚の苦悩の日々」も、その人の中では“宗教家としての自分の出発点”として重要視されていることが見えてくる。

それは⑤第九章「老子の母を食う」の中でも、「私は遊びざかりの子供時代に無理矢理結婚させられ、大人にデッチ上げられた為に、母のそばで甘えたり、抱かれたりということを全て拒絶されてしまった。…(中略)…それで中学生になったときから私の放浪生活が始まった…(中略)…母の愛を充分に受けられなかった孤独な子供は、天の乳房を求める…(中略)…天の乳房とは神の愛である。」と端的に表されている。

また、他は5～6冊中3～4冊というふうに平均して触れられていく中、本以外のことから見えてくるにも関わらず、「2冊中0冊」というように、全く触れられることのない「U：△寺の混乱期」というものも見えてくる。

それは例えば〔江刺1994〕が、第五章「自伝はマユにツバをつけて読む」の中で、「私たちは、自分の通ってきた道を振り返り、なにごとく隠さず、自分にとって都合の悪いこともすべて赤裸々に書けるだろうか。私は書けない。」と綴る部分にも通じてくる³⁰。

それは(註10)で触れた①～⑥にみられる“年齢・年代のズレ”、(註20)で触れた“結婚したはずの「難民の女」が、通りすがりの出会いとして記される部分”にも関わってくる。

またそういった“人が自らを振り返る”という、それ自体“人生の(再)構築”の過程である行為は、人は数々の思い出を“選択”しながら生きているということ突きつけてくる。そのような“思い出の選択”は、例えば⑤に極端にあらわれている。⑤は“僧侶兼牧師”になる“転換”を綴ったものだが、それまでの①～④の“僧侶時代”では、決して振り返られる——思い出される?——ことが無かった、“幼少期に「祖母から賛美歌を…」習った”ことが、“NYにて祖母の霊と賛美歌を歌ったこと”と絡められる形で選択され、触れられている。

“他者”が意識されるとき

そしてこれら“人が自らを振り返る”という行為は、自己完結的に振り返られるものというよりも、自らに向けられた“他者——外から——の視線”が意識されたときに、振り返られる——主張される——ものである場合が多いのではなかろうか。

“聞き書き”は話し手と聞き手(書き手であることも多い)という“他者”同士の「共同制

作」から成り、自伝・自分史の類も最終的には“読者”という“他者”を意識している。

「自分」とは「他者」が存在することで成り立つとされるが〔鷺田1996〕、自分の為に書かれるはずの日記さえも、本当は“過去の自分”の行動やそれに伴った感情と向き合う、“現在の自分”という“他者”の視線が介入されることによって、成り立っているのかもしれない。

そしてそれはときに、他者へ向けられるゆえに生まれる“誇張”というものに繋がっていく。

その人は、年に一度「開山記念式典」を開き、集まった人々に——そして自らに——説教をする。2006年10月、その人は次のような話を涙ながらに説いた。

日曜日だから私はね、カーテンを閉めてるから〈家を〉飛ばしたんだ。ま、このうちはもう、どこか、海水浴場でも行ったと思って飛ばしたんだ〈勝手に決め付けて〉。

そしたらPが、「先生、なぜ飛ばすの？」だと言って、カーテンした家の前でお経あげてる。〈すると〉おばあちゃんが出てきて、ちゃんとその百円と、あの一、その、ミカンとかねりんご、〈ちゃんと〉入れてくれたの。

で、P、「先生、これ見なさい。なぜ、なぜ飛ばしたの？」…私、そのとき何も言えないでしょ？「すまなかった」って。「すまなかった」と私はお詫びしなきゃなんない。

だって〈この私が本来は〉一軒一軒飛ばしちゃいけないと教えたんだ。托鉢は一軒一軒、その家の幸せを祈るために、一軒一軒、と、飛んじゃいけない。

〈でも〉私は、ま、カーテンしてるから、も、海水浴かどっか行ったかと思って〈いたら〉、それで、おばあちゃんがちゃんとおったんだね。おばあちゃんがちゃんと出てきて。「先生、これ見なさい。一軒一軒、飛ばす、飛ばしちゃいけないと、先生言ったでしょ？」。「ああ、悪かった。」……「悪かった」と言っても、この人、承知しないの。

また、ここ〈△寺〉では、便所行くときには赤いスリッパ履きなさい。普通のときは青いスリッパで〈と決めてる〉。〈でも〉私は電話相談するためにね、も、シヨンベンしたくてしょうがない。で、そのままね、青いスリッパのまま、便所行ったんだよ。で、〈外に出ると清僧に〉「先生、なぜ赤いスリッパはかないんですか？」すると、〈私は〉土下座したわけだ、土下座。土下座しても〈清僧は〉「あれ、おかしいなあ…」と。

先の前半部分は、②「第六章〇〇山麓」の「行と折り」でも、次のように簡潔に触れられている、その人の経験談である。

まだ△寺を建立したばかりの頃は、清僧Pと二人で、浅草観音寺の前で「悲願△寺院の建立」のタスキがけで托鉢行をしたり、D市の市街を大柄な私と小柄なPの二人の僧侶が各門前に立ったりしたものだ。

このお布施は、寺の改修工事の借金にあてたり、活動資金になるものであったために、私は時々、お布施をくれそうな家を探して、三～四軒とばして行こうとするとPが「それ

は、いけないゾ……」と注意する。

そして後半部分は、③「第六章 共同体を訪ねて」の「ある施設にて - 心境を同じくする」にて、“その施設長がその人に聞かせた話”として登場するものと非常に似通っている。

あるとき、Z翁は、障害者の一人からひどい目にあつた。Z翁が、トイレで小便するとき、便所のスリッパと取り替えずに事務所のスリッパのまま小便した。あまりにも急いでいたのでそうしたのである。これを見ていたある二〇歳の女の子が「オッチャン、スリッパ、コンナコトシテエエノ？」と呟いた。

これにはさすがの翁も返す言葉がなかった。彼は思わずその場にヘタヘタと土下座して、オッチャンが悪かった許してくれと詫びたそうである、そうすると不思議そうに、へえー一とってその場を去っていったという。

△寺において、ある施設と全く同じような、“スリッパを履き替えずにトイレに入ってしまう、清僧から注意され土下座をした”という出来事があったのかは、私にはわからない³¹。

ただ、この2つは全く別の所で起きたことではあるが、“障害者から人として大事なことを教えられた”という経験談——これは△寺の教義でもある——としては、共通するものとなる。

その人は“他者”に教えを伝える手段として、似通った“托鉢飛ばし”と“便所スリッパ”の話、ひとつの経験談に仕立てることで、説得力ある説教にしようと努めたのかもしれない。

そしてそれは、その話を通して“誰に何を伝えようとするのか”という物語の象徴性〔桜井2005〕にもつながっていくのだと思う。

“外からの視線”が映し出す“△寺院の変遷”

先に“自分を見つめる他者の視線”に應えるからこそその「自分」について触れたが、この“他者の視線”は、ときに“新聞・雑誌等への掲載”といったマスコミの視線となって現れる——向けられる——こともある。

〈表2〉の「外からの視線」からは、「管長」としての“その人”や“その寺院”、さらには「U：△寺混乱期」を経て“住職代理（学僧）が率いることになった寺院”や、それと並存した“牧師となった管長による教会”などに、マスコミの視線が注がれていることがわかる。

それは、△寺を建立した管長への視線は同時に“その寺院・教会”への視線であり、つまりは「△寺院の変遷」をも浮かび上がらせるものであることに気付かされる。

〈表2〉「区分」からは、△寺には“三つの時期”と“四つの体制”が、建立から現在までに存在してきたことが見えてくる。

ここで取り上げる“外からの視線”は46件だが³²、その全体の内訳は〈表4〉をみると、「新聞記事（取材）」21件、「新聞記事（情報提供）」5件、「TV番組」4件、「雑誌（取材）」4件、「本（取材）」1件、「本（学術）」1件、「HP（公）」4件、「HP（個人）」5件、「他」1件となる。ここから、Ⅰ・Ⅱ・（Ⅲ）・Ⅳいずれの体制においても「新聞記事（取材）」による視線が圧倒的に多いことに気付く。

	区分	時期	寺院（教会）体制
Ⅰ	Q～T	△寺の草創・発展・安定期	管長（僧侶）による「△寺」
Ⅱ	U～Y	△寺の混乱・学僧による△寺の発展・安定期	住職代理による「△寺」
（Ⅲ）			管長（牧師）による「教会」
Ⅳ	Z	代理から管長への再移行期	再び管長による「寺院兼教会」

さらには同じ新聞記事であっても、「新聞記事（情報提供）」はⅡがほとんどを占めている。これは〈表5〉にあらわれている、“「1989年」に管長が△寺を出て「NYの神学校に入学」し、寺院体制がⅠからⅡへ移行して以来、「1995年」に「代理・清僧CDデビュー」（バンド結成）という企画により、Ⅱ体制が世の中の注目を浴びるまでの間”、△寺はどこからも注目されなかったことにも関わってくるのかもしれない。

Ⅱによる“バンド結成”は、単に寺院の運営難に立ち向かうためだけの対策によって生まれた企画ではない³³が、住職代理となった学僧たちが“△寺を守る為”に模索した痕跡のようにもみえてくる。それは「新聞記事（情報提供）」を利用することにより、“バンド”や“△寺清僧による絵画展”等の集客を計り、寺院運営に当てようとしてきたことにもつながってくる。

実際、運営はかなり厳しかったようで、ある宗教系雑誌（2001年）の取材には「△寺を取り巻く現実にはストレスはたまる一方。無縁仏供養のための納骨堂建立やペット霊園など妙案を思いつくが具体化でつまずいてしまう。「行政にはできない福祉を提供している」と自負しても、支援者の輪がなかなか広がらない」と、“悩める住職代理の模索”が示されている。

また「TV番組」・「雑誌（取材）」・「本（取材）」・「本（学術）」については、Ⅰ・Ⅳ（特にⅠ）へのものが圧倒的に多く、確かに管長としての“その人”が「マスコミにより時の人となった時期」があったことを示している。

その一方でⅡへの視線としては新聞・雑誌等への掲載は少ないが、「HP（公）」・「HP（個人）」からの注目が高いことがうかがえ、“管長”と“若き住職代理”との間では、世の中に対する“△寺（教え）の発信の仕方”に違いがあることも見えてくる。

また、△寺としては注目を浴びた管長も、牧師としての教会体制（Ⅲ）では、全体として「新聞記事（取材）」5件のみで、ほとんど注目されなかったことも見えてくる。

さらには〈表5〉をみると、各体制が注目を浴びるのは、本の出版やバンド結成といった何か目新しい企画が打ち出されたときであることが見えてくる³⁴。

特に“△寺（建立前も含む）の最盛期ともいえる1977年から1988年までの間（Ⅰ体制）”に、②③④がさほどの間を空けずに出版されていることから、（註25）でも若干触れたように、管長にとって、“本の出版”は“自らを振り返る”という——“他者”が関わるとはいえ——“個人的な行為”であると同時に、さらには寺院運営につながっていく“仕事——作家（創作）活動——”でもあったことが見えてくる³⁵。

また、代理と清僧のバンドデビュー以降はⅡ体制に対して、「HP（個人）」が多いとはいえ、継続的な注目が向けられているが、それは2002年に再び△寺に戻った管長によるⅣ体制に移行してからも、2件（2002年）・1件（2003年）と減少しつつも続いており、バンドや絵画の創作活動が、社会から受け入れられていたことも見えてくる³⁶。

“外からの視線”の内容については、次の視点によるものがほとんどを占める。

- ・△寺を建立した管長の「愛」（さらには業績）を称えるもの。
- ・日韓の狭間で苦勞したからこそ管長は弱者の気持ちがわかる。
- ・清僧から学べる△寺・バンド◎◎・△寺絵画展。

これらからは、当時から現代にかけての“障害者観”、さらには弱者であるゆえに強く優しく生きてきた…といった“（在日）朝鮮人観”等も垣間見えてくる。

利用される“外からの視線”や6冊の本

そしてこれら“外からの視線”は、ただ一方的に管長や寺院の変遷を見つめ続けていくだけの存在になるのではなく、視線を向けた対象から“利用される存在”ともなっていく。

例えば各本の内容部分でも触れたが、③の本文においては、実に9件にも及ぶ新聞・雑誌記事・テレビ番組を挙げ、ときに引用している。他にも、“妻Gの日記”や“支援者からの手紙”等、多数に渡る“外からの視線”を本文の中に散りばめている。

それは寺院の教えを絶対とする“当事者”としての管長の言葉を繰り返すだけでなく、その教えに賛同する“世の中の目”すなわち“外からの視線”——評価——を提示することで、その教えの絶対性を高めようとする“布教戦略”につながっていく。

それは、ある朝の、通称「赤い教本」³⁷をめぐる、興味深い話にもつながっていく。

〈赤い教本〉はタダで持ってちゃいけない。本当は売る〈も〉のじゃないけど。今、寺は〈老朽化で〉滅びようとしている。だから〈赤い本を借りる者は〉千円献金だ。子どもでも大人でも。ここのお寺の復興のために、雨漏りも風呂も水も、〈直すには〉百万円以上かかるから。この寺は日本人全体のものだから。これは〈今後はもう〉刷らない。刷ると数万円〈かかるの〉だからね。〈だから〉貸すのにも〈お布施を〉取りなさい。これは、血と涙で書いたものだ。本当は〈こういった経済活動は〉創立者がやるべきことではない。弟子のBがやるべきことだ。管長がやっっては「何だ？」となるね。

また“外からの視線”は、本への引用ばかりではなく、弟子の教化にも利用されていく。

ある朝、私は“△寺のことがよくわかるように”と、管長から雑誌記事のコピーを幾つか渡された。それは1979年1月に発行された“宗教家を取り上げたルポルタージュ”や、“宗教系雑誌の△寺にまつわる取材記事”で、他の弟子と共に私はそれらの記事を声に出して輪読していた。それは△寺の教義を理解していく、ある種の教化プログラムのようなものでもあった。

またそれは、純粹なる“外からの視線”を扱うばかりではなく、ときに管長自身が執筆した各本の輪読という形で現れることもある。

例えば③「第七章 △寺院の誕生」「小林君の逃亡」の“妻Gの日記”には、たった数行だが「三月六日。朝のおつとめを簡単にし、『①』の五体投地のところの読書会をした。小林君はまだ声はよわいが指示されたところを読みあげた。」という記述が見られ、こういった内外の記事を使つての教化・布教は、開山当初から行われていたことがうかがえるものとなっている。

“人生の執筆”が果たしたもの

このように見ていくと、その人にとっての“人生の執筆”が果たした役割とは、人が生きていくということに含まれるはずの多数の意味合いのうちの、2つの面を“充実させるもの”であったことが見えてくる。

ひとつは“自らを振り返る・伝える”という“生の主張”であり[※]、もうひとつは、それによって生計を営むという“生命維持の元”といえそうなものである。そしてこれら2つは、どちらも社会との関わりを抜きにしては成り立たないものであることも見えてくる。

日々の中で関わってくれた“他者”が居てからこそその経験が“自ら定めた人生”さらには“宗教思想”となり、また信じ支援してくれる“他者”が居てからこそ△寺の“宗教活動”は成り立ち、それが寺院運営という自分自身や弟子達の“生命の維持”にもつながっていった。

その人にとって“人生の執筆”とは、そういった広い意味での“生きる糧”だったのではなからうか…と、私は解釈したい。

おわりに

「私は解釈したい」…ふざけた文面にもみえてくる。

この文章で取り上げた“その人”は、およそ90年前に、朝鮮半島の北部に、男として生を受け、日本の霊山の麓の寺院で、僧侶兼牧師という宗教家として、毎日のように食事をすることで生命を維持しながら、宗教的共同体という家族と共に、暮らしている“人”である。

その人はときに雑誌において「愛の行者」と称えられ、ときに学問において「在日コリアンの宗教」家とされる〔飯田2002〕こともある。そして、この私も「在日コリアン僧侶」を求める中で、その人と出会うことができた〔渡邊2007〕。

しかし、当たり前のことだが、その人の話を聞いていると、それはときに宗教家のそれとなり、ときに男としてのそれとなり、ときに朝鮮人としてのそれとなったりする。

その人は同じ立場のみに立ち続けて生きているわけではない。そんな無限の可能性を持つ“その人”を、いくつかの語りから、いくつかの表情から、いくつかの状況から、たった一つの“物の見方”のみで捉えようとするのは、本当はおかしなことなのではなかろうか。

一昔前は、“弱くも逞しい人々”ともされた“[在日コリアン]とされる人々”も、近年は例えば〔浅川2006b〕のように、“悲劇的な見方”すなわち“特別視”を続けていくことは、“本来は「移民問題が発端」であり、さらには時代ごとに変化していった「問題」を慎重に議論し「未来」につなげ、「[在日]問題を過去の「歴史」へと転換」していくべきもの”であることに目を閉ざさせてしまう、「在日イデオロギー」として覆い被せてしまう危険につながってってしまう、「神話としての『在日』問題」を温存させていってしまう…というような“視点”で捉えられることも増えてきた。

そういった視線が飛び交い始めた中で、私は“その人”を通して“[在日コリアン僧侶]達といえそうな存在”と“その生き方”を、どのように捉えることができる——できない——のだろうか。常なる課題としておきたい。

註

1 2007年7月現在のもの。

2 図書室を含め、朝鮮半島南北統一や、故郷△△山麓にちなむ名前が多く付けられている。

3 「小さな図書館」の書棚には『記入式・自分史の本』（バイオグラフ社編・1989年・フィルムアート社発行）や世界史年表などもあり、「自分史」に近い意識を持つのは確かだが、一方で「宗教思想」についてが中心となる本（③④）の存在を考えると、明確に全ての本を「自分史」として捉えるのは難しい。

ゆえにここでは、“これまでの生き方も宗教思想の形成も、全てがその人の誕生から現在までにおいてなされたこと”とみなして「人生の執筆」と名付けてみることにした。

なお、この文章の中では④の“口述”や、寺院における実際の“説教”なども、「人生の執筆」と似たようなものとして捉えている。“書いたものと話したものでは全く違うのでは？”という意見もあると思うし、本当は区別も必要なのだろう。だが、ここではあえて分けることなく、“その人が自分をどのように定めてきたのか”、“その人が何を伝えたかったのか”が“読み取れるもの”という視点を大切にできなかったのと、資料としては“口述”よりも6冊に及ぶ“記述”の分析を中心としたことも、「人生の執筆」と名付けた動機となっている。①では“釈迦の教えを広めよ”との法名（著書名）の由来を挙げているが、④では本来の法名の最後の一字を、後に自分で変更したものが“現在の法名（著者名）”であると記している。ちなみに、その記述によれば本来の法名が“△寺”の寺号の由来のようである。

4 ①では“釈迦の教えを広めよ”との法名（著書名）の由来を挙げているが、④では本来の法名の最後の一字を、後に自分で変更したものが“現在の法名（著者名）”であると記している。ちなみに、その記述によれば本来の法名が“△寺”の寺号の由来のようである。①では“釈

迦の教えを広めよ”との法名（著書名）の由来を挙げているが、④では本来の法名の最後の一字を、後に自分で変更したものが“現在の法名（著者名）”であると記している。ちなみに、その記述によれば本来の法名が“△寺”の寺号の由来のようである。

- 5 正確には出版時というよりも、執筆開始の時期から振り返ったとすべきだろう。
- 6 “父の山籠り前に母は宿していたとしつつ、3年程で降りた父と母の間に生まれた”という記述には矛盾があるが、ここでは、あくまでも記述のままに従っておく。
- 7 当時、朝鮮半島に住む人々は「外地」としての区別はあったものの「大日本帝国」の者ではあり、家庭にある程度余裕のある子弟は、「内地」の高等教育機関で勉強する者もあった。現在80歳つになる在日1世の男性は、日本の大学を卒業し日本人女性と結婚、戦後も日本（神奈川県川崎市）に住み続けてきた。その父親も日本の大学を卒業したそうで、“親父が留学していたから、別に内地への進学は抵抗も無く、ごく普通の選択だった”と振り返る。
- 8 これら題名もまた、その時点における、その人生への解釈（名付け）といえるだろう。
- 9 表紙や中扉のデザインもまた、その時点における解釈と捉えられるだろう。

10 ①では（註6）のようにあるが、②では乳呑み児の長男以外はまだ両親の間には誰も生まれていなかったことが記されている。後に書かれた全ての本の中でも、その人は自分の誕生年を「1922年」としていることからすると、①の冒頭の記述は“勘違い”や“聞き違い”ともいえるものなのかもしれない。

しかし①～⑥の他の出来事（特に幼少期の「受けた教育」〈表2〉）にも6歳程の開きが出ていること、また“外からの視線”といえる新聞社などに応える年齢にも開きがあることをみると、その人は何らかの意図により、ときに年齢を偽る必要があったのかもしれない。

ある弟子がその人に聞いたところによれば、戸籍とパスポートの間では「6歳程の開きがある」という。このことは、もしくは当時の年代や社会背景からすると、出生と同時に届出が出されなかったという可能性も示しているかもしれない。例えば、現に茨城県に住む、昭和4年生のある日本人男性の誕生は、2、3年を経てから下の兄弟の出生届と一緒に届けられたそうで、実年齢と戸籍年齢には3歳程の差があるという。

しかし正確な年齢は不明でも、2007年現在、老いた“その人”は確かに存在している。

11 この部分は、若干の加筆修正がみられるのみである。

12 「精薄」とは「精神薄弱」の略で、現在は「知的障害」と言われる。

フリー百科事典『ウィキペディア』によれば「頭脳を使う知的行動に支障があることを指す」が、法律上の定義は無い。また「精神遅滞」・「精神薄弱」は「すべての資質、能力が遅れているのか、という印象を与えるため」使用されなくなっている。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E8%96%84%E5%BC%B1>)

現在は「知的障害」という用語（捉え方）も、「害」の漢字を「がい」とすることが行政では一般化しつつあるが、当事者からは“呼称を変えるだけでは意味無し”という声もある（2007.4.2『東京新聞』28面「「障害者」→「障がい者」自治体でじわり浸透」）。

- また現在は、「体の不自由な方」といった「～方」という使われ方も一般化しつつある。
- 13 「光を求めて」という“括り方”は①でも使われるが、②では、より具体的に、つまり△寺院建立の動機になる“弱者（知的障害者）との出会い”に重点を置いたものとなっている。
- 14 こういった帯の文章は、出版社という“他者”による“その人の人生に対する解釈”、すなわち“外からの視線”ともいえるだろう。
- 15 「信仰」とは“生活を教えと結びつけたもの”ではないか。例えば日本仏教における寺院（僧侶）の“宗教活動”は、同時に無理なく“生業活動”ともなっているのではなからうか。
- 16 ゆえに、この④は他の本（その人自身が書いたもの）とは違い、その人の“語り”に対し、編集社という他者の視線、つまり（註14）で触れた“外からの視線”が加わったものとなる。
- 17 ある施設にて、「花が笑っているよ」と笑った障害者が、“この花をもっと大きくしてあげるんだ”と茎に手を伸ばし引き抜こうとしたのを、“抜いては死んでしまうよ”と、その人はあわてて止めたのだという。その人は花にも笑顔があるものか…と、私たちとは違う感性で世界を見ていた人達の存在に感動すると同時に、その一方で“引き伸ばすんだ”という誤った発想をしてしまう彼らに、“神聖さ”と同時に“教育”の必要を感じたのだという。
- 18 新興宗教などで両方の教えを融合したようなものでは、僧侶・牧師とはまた違う教団独特の立場を置くものもあると思われるし、また僧侶から牧師の立場に移行した例〔松岡2003〕もあるが、“僧侶兼牧師”と両方の立場であろうとする人はそういないように思われる。
- 19 これは帯にも「(本文より)」として抜粋されている。
- 20 ①②では韓国で知り合い平凡な時を過ごした出家前の妻（「難民の女」）の体験談として登場するが、この⑥では「同族の戦争 - ある難民女性が目撃したもの」とあり、それ以前の本を読まない限りは、婚姻関係を結んだ人であることがわからない記述となっている。
- これは、⑥では韓国の前妻の“体験談”に重点が置かれているからとも取れるが、同時に“自分の人生は赤裸々には綴らない”という意識〔江刺1994〕に基づいている可能性もある。
- 21 特に「ドヤ街の人生」、「三大寄せ場 - 横浜寿町」、「囚人の中にこそ仏がいる」は、③にて「第四章 ドヤ街の人生」、「第五章 志願囚人をめざす」で使用したものを、当時の文章そのままに掲載したものである。
- 22 現在も、不定期発行の手書きニューズレターの中で、この清僧日誌シリーズは続いている。
- 23 韓国38度線付近への移転計画は2007年現在では立ち消えてしまった。人生は予定通りには進まぬものだが、いつか‘冊目を書こうと中国の朝鮮族自治区や故郷を訪ねるのを繰り返している現在、将来どこかで’が刊行され、⑥までの人生が（立ち消えとなった計画も含めて）“どのように振り返られるのか”を、私は今から楽しみにしている。
- 24 「おおよそ」としたのは、①～⑥の間では若干の年代・年齢のズレが見られ、ゆえに記述の一部は、6冊のうち最も妥当性の高いと思われるものを取り上げたためである。
- 25 もちろん、純粋に自分の人生を振り返ってみようという意識（情熱）が6冊中最も強かったのは最初の作品“①”ではなからうか。

それ以降は、①が評判を呼んだことが（例えば“外からの視線”に注目すると、①出版の4ヶ月後にジャーナリストの取材を受けていることがわかる…）、△寺建立という大きな流れにつながり、世間から注目（期待）される中で、加筆修正が多い②以降の本が執筆されていった（すなわち“仕事”として綴る面が強まっていった…）といえるかもしれない（…僧侶兼牧師としての⑤⑥は、①と同様に“情熱”の面が再び強まったともいえるかもしれないが）。

- 26 本人が「私は納得するために書いている」と自覚しつつ書いていたかどうかは別として。
- 27 <表3>を見ると、①②では「思想」が綴られる章・節が少ない（0・1）のに対し、③④では極端に増えている（27・35）のがわかる（ちなみに、⑤⑥は①②とは違い、経験（A～Z）と「思想」のバランスが（7・19）と保たれているのがみてとれる）。
- 28 これは①～⑥の全てに当てはまるかもしれない。“人生は旅に例えられる”というが、その人も例外ではなく、実際に転々とした居住地や、俗人から僧侶・牧師へという仕事の変遷を、「放浪」さらには「求道」という言葉で、普段から表現している。
- 29 そして、その教えは、今この瞬間にも現在進行形で構築されていっていることだろう。
- 30 この文章を書く“私”は、こういった記述や「年譜」作成によって、“その人”のプライバシーに確実に触れてしまっているのかもしれない。しかし、①～⑥までの本は全て同じ著者名（法名）で「出版」されたものである。もしも興味を持ち、全てに目を通したならば、誰しもが容易にその事実に気付いてしまうものであり、その人生についての記述は、どこから先が侵害となるのか、あまりにも曖昧で悩んでしまう。ゆえに苦肉の策として（読む人が読めば判るのは確実だが）、仮名を基本とした。これはまた、〔渡邊2007〕を書く際に、その人から“ある人・あるお寺と伏せておきなさい”と言われたことにも依っている。
- 31 無かったとも言い切れないが。
- 32 2007年8月検索現在（見落としもあるかもしれないが…）。
- 33 住職代理による“バンド結成”という企画は、I・IVの管長が打ち出している“△寺のあり方（障害者に対する視線）”に、ある種の異議を唱えたもの…とも言えるかもしれない。管長が再び△寺に戻ったIV体制になると、II体制を維持してきた学僧は代理を降りた。それは管長と代理の間で“見解の相違”（管長：どちらかといえば聖なる存在という対象、代理：“聖なる…”を超えて互いを尊重しあう見方）が生じたことが切っ掛けのようである。
- 34 これは“マスコミの取材体制”も浮き彫りにしているのかもしれない。
- 35 それは③の「帯」からもうかがえる。
- 36 「HP（個人）」の日記などには、（註33）で触れた“見解の相違”によって生じた“清僧のバンド降板”を惜しむ例えば下のような“声”が若干見られる。

…ほかの大好きなバンド◎◎、清僧さんの活動が???のようです。ライブハウスで叫ぶ清僧さん、自分で描いた絵をうれしそうに次々と見せてくれる清僧さん、△寺の気持ちいい風。◎◎の空気や清僧さんの絵は「あ。いいんだあ」という抜けた感じ。絵も、生きて

りや度々おこるつらいことも、こんがらがることなかったんだなあ。清僧さんに感じさせてもらった「あの感じ」を大切にしよう。(2002年10月7日(月)あの感じ)

先に(註33)にて、代理は“聖なる…”を超えた“障害者観”を持っていたとしたが、こういった“障害者と共に組んだバンドのライブを聴いて、何か大事なことを感じ取った”という感想や、バンドや絵画の創作活動への取材に応える代理の考えを見ていくと、管長の“障害者観”とした“どちらかといえば聖なる存在…”と、代理の“障害者観”は、根本的な部分では、大して相違はないのかもしれない。また、“崇める対象”と“共に生きる対象”というように形は違えども、“大事なこと”(教え)を伝え広めるという点では、どちらも世の中に問う——影響を与える——ことができているといえるかもしれない。

37 1983年7月に発行された赤い表紙の△寺の教本、『超宗派〇〇山△寺祈祷行特集』を指す。仏教のお経、聖書の句、賛美歌、管長オリジナルの祈り、△寺の使命などが載っている。

38 これは、人は皆“良きも悪きもひっくるめて全てを肯定して生きていく”ということに、さらには“そうでなければ生きられない”ということにも、つながっていくのではなからうか。

参考文献

- ・浅川晃広2006a『「在日」論の嘘 - 贖罪の呪縛を解く - 』PHP研究所
- ・浅川晃広2006b『「在日」問題の永続化は、日本にとってなぜ有害なのか?』『別冊宝島 嫌韓流の真実!ザ・在日特権』宝島社
- ・飯田剛史2002『在日コリアンの宗教と祭り - 民族と宗教の社会学 - 』世界思想社
- ・井上俊1996『物語としての人生』『ライフコースの社会学』岩波講座 現代社会学9
- ・上野千鶴子(編)2001『構築主義とは何か』勁草書房
- ・江刺昭子1994『女の一生を書く - 評伝の方法と視点 - 』日本エディタースクール出版部
- ・エドワード・ファウラー2002(1996)『山谷ブルース』川島めぐみ(訳)新潮社
- ・香月洋一郎2002『記憶すること・記録すること - 聞き書き論ノート - 』吉川弘文館
- ・小林多寿子1997『物語られる「人生」 - 自分史を書くということ - 』学陽書房
- ・桜井厚2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房
- ・野辺明子2000「障害をもついのちのムーブメント」栗原彬 他(編)『越境する知2 語り：つむぎだす』東京大学出版会
- ・福田定良1973『宗教との対話』法政大学出版局
- ・保莉実2004『ラディカル・オーラル・ヒストリー - オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践 - 』御茶の水書房
- ・松岡広和2003『イエスカ釈迦か 牧師さんになったお坊さんの話』フォレストブックス
- ・松本圭介2005『おぼうさん、はじめました - 仏教サイコウ! 東大新卒IT僧侶の修行日記 - 』ダイヤモンド社

- ・ 鷲田清一1996『じぶん・この不思議な存在』講談社
- ・ 渡邊徳子2007『私は誰？ - ある寺院兼修道院にて与えられた立場の中で - 』『歴史民俗資料科学研究』12 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科
- ・ L.L.ラングネス, G.フランク1993『ライフヒストリー研究入門 - 伝記への人類学的アプローチ - 』米山俊直, 小林多寿子(訳) ミネルヴァ書房

新刊紹介

玄侑宗久 著

『お坊さんだって悩んでる』

誰もが「俗世」に生まれ落ち、ある程度の歳に達してから、親の幸せなどを背負い、あるいは願いを託されて「出家」し、誕生するのが、アジア世界（小乗仏教）に広がる仏教僧への成り方である。しかし、アジアの東側に位置する日本仏教の場合、それとは異なった成り方である場合が多い。明治期に僧侶への妻帯が認められたことを契機に、現在の日本の僧侶の多くは、寺院に生まれ落ち、やがて住持職に就き、ときに大寺院の法務員なども務める傍らで、自らもいつしか“一家の主”となっている。もちろん、俗世に生まれ出家し僧侶となる人もいる。

アジア世界における仏教寺院（さらにはそれを支える社会）には、俗世に交わる必要がない仕組みが築かれており、出家した僧侶は一応、俗世の悩みには惑わされることなく、仏道を精進できる環境が与えられている。一方、“一家の主”であることも多い日本仏教の僧侶には、俗世とは決して切り離すことができない悩みがおのずと科せられてくる。

その当事者であり作家活動も手掛ける玄侑宗久師によって、ありのままの本音が提示されているのが本書である。

住持職に就く人々を対象とした『月刊住職』が改題された『寺門興隆』（興山舎）に連載された「そもさん 玄侑和尚の説教部屋」（2004.1～2006.3）に、加筆修正が施された俗世の書棚に日の目を見た。

ここには、俗世と出家の間で揺れ動く日本全国の僧侶たちの悩みが寄せられている。

全部で27の質問（相談）を、〈第一章〉お葬式とお墓・〈第二章〉お布施の値段・〈第三章〉現代社会の生と死・第四章〈お寺の本当の役割〉・〈第五章〉伝統と習慣を見直す・〈第六章〉お寺の後継者と檀家…に分けて載せている。

具体的な悩みをいくつか挙げると「最近の遺影は派手すぎるのでは？」・「お布施はいただくのに、寄付をするのが嫌いなのは悪いこと？」・「携帯電話を手放すのが不安でたまらないのですが、病気でしょうか？」・「お寺はなぜ大きい？維持費も掃除の労力も、無駄にかかるのでは？」・「お寺に定休日があってもよいか？」・「娘が住職を継ぐと言っているが、女性住職など初めてでとまどっている」・「住職の跡取り息子が茶髪。どういさめるべきか？」…など興味深い悩みが並べられている。

これらの悩みの本質は、一般家庭（一般人）に於けるそれとほとんど変わらない。違うのは、ここで悩める人たちが、出家した僧侶であり、その妻や夫であり、子どもたちであるということである。この人たちは俗世と変わらぬ家庭生活を営みつつ、同時にいかに聖職者という生き方を実践できるか（あるいは期待に沿えるか）と、日々模索している。

本書から、日本仏教の「お坊さん」の強みは、俗世の悩みを当事者として理解し、仏教の知恵に照らし合わせつつ、寄り添うことができることにあるのではないかと思えてくる。

（渡邊徳子）

278頁 文藝春秋 2006年7月刊

〈表1〉管長による「本」目次 (※A-Zは年譜の「区分」に同じ。「思」は管長が創り・取り上げた「思想」を述べている部分を表す。) (なお、「ほぼ同じタイトルで、記述内容も全く同じ文章か、もしくは若干の変更しか見られない部分」の「章」や「節」には網掛けを施した。)

① 1977			② 1983			③ 1984		
章	節	※	章	節	※	章	節	※
	上梓によせて(駒澤大学副学長)			まえがき			すべての宗派を否定する	
少年時代	△△山	A	父の修業	A	親善と共に生きる	序章 精海寺院とは何か	宗示しの事	思
	白いチョゴリと韓国語の禁止	A	深夜の成	A			「願望」に我をない命の教育	思
	十一歳で十八歳の妻と結婚	A	忘れ事	A			身も七つて等か「真善道」	思
	一人漢州へ	B	祖母の宝	A			四苦八苦の意味	思
	東京へ	B	空に舞う白いチョゴリ	A			トルストイとカンジー	思
	「あちらの人……」	B	白布禁止令	A			共に喜び、共に苦しむ	思
	真白遺州へ	D	民族法政政策	A			「読書」にみる現在の機軸	思
	奉天	D	二十、八歳の小学生たち	A			知恵おくれの子を道徳する教育ママ	思
	韓統舎の〇組	D	日本赤十字運動	A			大自由人への道	思
	韓古人の修業	D	故郷	A			東洋に於ける人々の道	思
故郷をあとに	石鏡と白馬	C	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		北洋のパンネとカデマエ	思	
	漢州開拓団	C	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		聖フランシスコの天眞無邊	思	
	散居後の東京	C	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳三昧・托鉢行の懐かしみ	思	
	ソ連の東欧・満州開拓団の難境	D	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		あか掛けするということ	思	
	人長委員会の修業	D	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		萬徳教師の機軸	思	
	脱出	D	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		ドンデン返しの意味	思	
	革命歌	D	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		生きる目的とその意味	思	
	國境の結核	D	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	短編小説	E	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	道徳論の資金集め	F	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
日本の敗戦・韓国動乱	勤皇勅告・徳川の倉山	G	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	勤皇勅告に賛同	G	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	敗走	G	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	敗走・父の死	G	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	敗走のあとをたどる	G	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	結婚	H	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	三善秋のスパルタ修業	I	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	名古屋学	I	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	名古屋通学旅行	I	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	大正維新入学生	I	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
留学	四十一歳の東大大学院生	J	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	海防の神統法	J	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	〇〇寺	J	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	在日大衆開業	K	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	「支那大臣にならないうか……」	L	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	五体投地の行	L	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	ソウルの曹溪宗寺院での球技体験	L	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
出家	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
先を求めて	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	
	出家	M	韓 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我	A		道徳的・道徳的・道徳的を知る懐かし	思	

④ 1987		
章	節	※
I 神樹樹の下に	六つの名前	B
	大いなる△△山頂の淵	A
	震動と長火の遊行	思
	成と崩の神話が残るもの	思
	母なる〇〇山、父なる△△山	思
	北東アジア文化圏	思
	△△山湖水は人類をめぐらせ、育く?	思
	毒樹の神樹体験	J
	八方の手	A/O
	八方の手 五体投地	L
II 神樹への出発	不可現の世界に生かされている	M
	出家の世界は非常識の世界	M
	釜山の曹溪宗寺院での修行	M
	明鏡から火の玉が飛び出す	M
	権利人間	M
	主婦の愛	M
	女性と神樹体験	I
	関中輸送車事件	思
	伊藤博文がやったこと	思
	安藤和東洋平和論	思
III 日韓の魂を呼び起こす	「文化政治」下での民族政策	A
	韓国朝鮮の両者の宗教を破壊	A
	韓半島野立の事	思
	韓半島野立の事	思
	朝鮮に流した韓田牧師	A
	「本当に朝鮮人を愛しています」	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
IV 今、なぜ△△奇なのか	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
	「生きたい朝鮮の日本人」	思
	なぜ知事選に負けたのか	思
V 一つの世界の一つの夢	大きな意欲の時代	思
	便利イコール幸福ではない	思
	スモールイズ・ビューティフル	思
	神師は徹底して戦争を否定した	思
	最高の善は水の如し	思
	道徳の中にワールド・ガバメントの精神がある	思
	正々たる文相	思
	無常とは自然と一体になること	思
	三種の神聖の意味	思
	山頂の中に世界運轉の思想がある	思
「茶室」とは何か?	思	
△△山は未来の地球を象徴する一大聖域	思	
M 菅長プロフィール		
あとがき		

⑤ 2000		
章	節	※
第一章 三八度線に行く	祖母から賛美歌を祖父からは千字文	A
	十歳で強制結婚	A
	少年期から中学生時代まで	B
	希望の旗立ち…しかしそこで見たものは	C
	愛文へ…そして死のどん底から、生命の喜びへ	C
	イザヤの衣食の霊力	F
	脱乱動	F
	交際の芥	G
	結婚	H
	三流校の副学部長	H
第二章 私にとつての三八度線、忘却を許さぬ歴史	留學生時代	I
	「国家」	I
	「罪を併せられ」	J
	「愛文へ」	K
	「愛文へ」	K
	「愛文へ」	L
第三章 五六年ぶりの祖国	「愛文へ」	M
	「愛文へ」	M
第四章 わが弟たちとの抱擁	「愛文へ」	NO
	「愛文へ」	NO
第五章 弱者とともに生きた人生	「愛文へ」	RS
	「愛文へ」	RS
第六章 平伏し無くなって生きた人々	「愛文へ」	W
	「愛文へ」	W
第七章 愛と哀しみのイムジン河	「愛文へ」	X
	「愛文へ」	X
第八章 希望の足音	「愛文へ」	X
	「愛文へ」	X
第九章 別章 韓国の大思想家 多夕 柳永多	「愛文へ」	思
	「愛文へ」	思
M 菅長プロフィール		
あとがき		

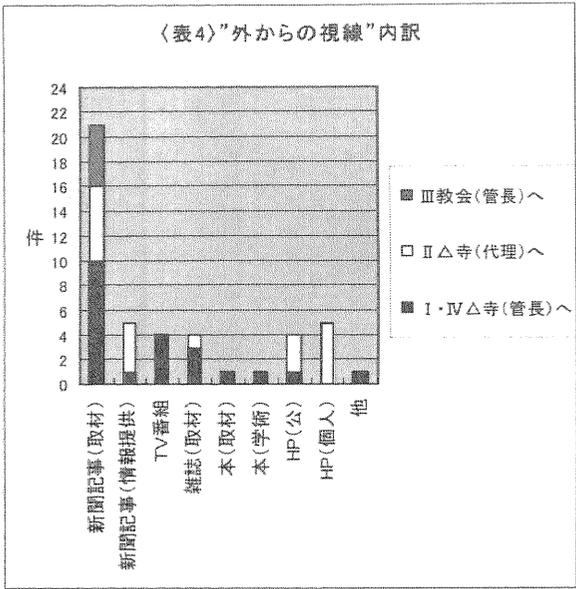
⑥ 2004		
章	節	※
第一章 三八度線に行く	私の「産場所」はどこ?	思
	「産場所」はどこ?	思
第二章 私にとつての三八度線、忘却を許さぬ歴史	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
第三章 五六年ぶりの祖国	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
第四章 わが弟たちとの抱擁	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
第五章 弱者とともに生きた人生	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
第六章 平伏し無くなって生きた人々	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
終章 三八度線が呼んでいる	大団の教養の一環で	G
	大団の教養の一環で	G
M 菅長プロフィール		
あとがき		

〈表2〉管長の「人生」略年譜(同時に△寺院の変遷)(①~⑥をもとに筆者作成)

西暦	※Ⅰ 年齢	社会	結婚	受けた教育	生業	活動・出来事	著書	外からの視線	居住地	※Ⅱ 区分
1910	12	百濟聯合 朝鮮労働軍 事件								
1919	28								朝鮮	A管長誕生前後 (幼少期)から軍 婚の苦悶の日々
1922	31									
1928	37									
1932	41								朝鮮	
1935	44								満州	
1937	46								日本	
1938	47	1939創立改 名公布 (1940年実)							日本	B満州・日本へ の豪出から自立 の日々。また日本 においては寧ろ も辛澁を渡め た日々
1942	51								満州	
1945	54	3 東京大 学退学 8 日本敗 戦 朝鮮半 島南北分裂							日本	
1946	55								朝鮮 (北)	
1947	56								朝鮮 (北)	
1948	57								朝鮮 (北)	
1949	58								朝鮮 (北)	
1950	59								朝鮮 (北)	
1952	61	6 朝鮮 戦争							朝鮮 (南)	
1953	62								朝鮮 (南)	
1954	63								朝鮮 (南)	
1955	64								朝鮮 (南)	
1959	68								朝鮮 (南)	
1962	71								朝鮮 (南)	
1963	72								朝鮮 (南)	
1965	74								朝鮮 (南)	
1967	76								朝鮮 (南)	
1968	77								朝鮮 (南)	
1969	78								朝鮮 (南)	
1971	80								朝鮮 (南)	
1972	81								朝鮮 (南)	
1973	82								朝鮮 (南)	
1974	83								朝鮮 (南)	
1975	84								朝鮮 (南)	
1976	85								朝鮮 (南)	
1977	86								朝鮮 (南)	
1978	87								朝鮮 (南)	
1979	88								朝鮮 (南)	

1980	58	基壇の△寺院を設立・移住	17 賢徳師Gが東京で長男出産 2 賢徳師Gが寺田として入山	11 新聞 1 地方系新聞 2 ローカルテレビ番組 3 仏教系雑誌 4 テレビの取材(放送日・番組名不明) 6.5 地方系新聞 (特集: 仏教と健康法)原稿投稿	を果した時期	
1981	60		その後、清僧・学僧が次々に入山	テレビの取材(放送日・特集: 清僧に献身する現・僧侶たち)原稿投稿	マスコミから多くの取材を受けた時期	
1983	62	宗 宗教法人の認可が降りる	8 賢徳師Gが次男を出産	11 新聞 7 △寺院「教本」	②A-Sまで振り返り未決(本報野に)	
1984	63			12 ② 1 新聞 1 新聞 地元ローカル記事(記事・掲載日不明) 2 仏教系雑誌	S	
1985	64		7 △寺院を移転・移住	5 ③ 6 ある監督が父を基にドキュメンタリー映画制作を希望(映画製作される?) 7 △寺院・21世紀への伏魔文 7 テレビ番組	③A-Sまで振り返り未決(本報野に)	
1986	65		7 山神閣を建立	2 取材を受ける 5 仏教系雑誌	T△寺の発展期・安定期	
1987	66			11 取材を受ける(正統には「共同制作」)	④A-Tを振り返る	
1988	67			5 ④	U△寺の発展期	
1989	68	1 現在の寺母と派筋を機に絡絡	5 「68歳」で神学院入学(1991卒)	1 NYに分院設立準備で消息 9 消息が現れ牧師を目指す 冬 日本に一時帰国。ある導師より学費頂き、次男連れ再NYへ 5 東京で教会を開く 西日本で教会を開く 中国と北の国境付近訪問 九州で教会を開く (学僧△寺院では、 [住職代理+清僧に よる]の学僧)	アメリカ合衆国	Vさらなる意思を求めた日々
1990	69			6 新聞(教会へ) 9 新聞(教会へ) 10 新聞(学僧△寺院へ) 11 CD紹介HP(学僧△寺院へ) 11 新聞(教会へ) HP(学僧△寺院へ)		
1992	70			8 公式HP(学僧△寺院へ) 9 HP(学僧△寺院へ) 6 新聞(学僧△寺院へ) 5 新聞(学僧△寺院へ) 10 新聞(学僧△寺院へ) 11 HP(学僧△寺院へ) 11 新聞(学僧△寺院へ) 12 新聞(学僧△寺院へ) 12 新聞(学僧△寺院へ) 4 新聞(学僧△寺院へ) 6 新聞(教会へ)	日本	△寺院では住職代理による学僧中心の活動期 X南北統一への希望の日々
1994	74			6 教会にて「共同宣言祝賀の祝い開催」 6 新聞(教会へ) 夏 仮命で閉鎖療養の町訪問		
1996	75		各地の家を「教会」とし、牧師を務める	12 新聞(学僧△寺院へ) 3 新聞(△寺院・管長へ) 11 仏教系雑誌 3 HP(学僧△寺院へ) 3 学系系文庫(在日コリアンの宗教として) 6 民族系新聞(再び管長陣いる△寺院へ) 10 HP(元住職代理と清僧へ) 3 HP(元住職代理と清僧へ) 4 民族系新聞(再び管長陣いる△寺院へ)		
1997	76			北の放牧に里帰り (10 管長が△寺院20周年記念式典へ参加)	⑤A-Xを振り返る X Y念願の構想が叶います! 希望を持つ日々	
1998	77			5 管長が再び△寺院へ戻る(学僧・清僧の数は減っていた)	Z△寺に再び戻った時期(再び管長が△寺院を率いること)	
1999	78		△寺院にて僧侶・牧師を務める(宗教法人の名称を変更)	8.15 ⑥ 8 民族系新聞に著評 ⑥ 雑誌(韓) 著者リスト教新聞社10名と冬ソウルのインタビュー(リアル)	⑥A-Zを振り返る	
2000	79	5 南北協議会設立・南北共同宣言(平壤にて)				
2001	80					
2002	81					
2003	82					
2004	83					

〈表 3〉各本①～⑥に見られるA～Zに該当する「節」数							
	①	②	③	④	⑤	⑥	A～Zを取上げた冊数
A	3	16	-	6	2	4	5冊／(6冊中)
B	2	9	-	1	1	-	4冊／(6冊中)
C	6	6	-	-	2	-	3冊／(6冊中)
D	6	7	-	-	-	4	3冊／(6冊中)
E	1	1	-	-	-	-	2冊／(6冊中)
F	2	2	-	-	2	1	4冊／(6冊中)
G	5	5	-	-	2	12	4冊／(6冊中)
H	2	2	-	-	2	-	3冊／(6冊中)
I	3	4	-	1	3	-	4冊／(6冊中)
J	7	1	-	2	1	-	4冊／(6冊中)
K	2	2	-	-	2	-	3冊／(6冊中)
L	3	4	-	1	3	-	4冊／(6冊中)
M	7	8	-	5	3	-	4冊／(6冊中)
N	2	2	-	-	1	-	3冊／(6冊中)
O	6	8	13	1	2	12	6冊／(6冊中)
P	21	2	-	-	-	-	2冊／(6冊中)
Q		2	2	-	-	-	2冊／(5冊中)
R		2	4	-	1	-	3冊／(5冊中)
S		11	8	-	1	-	3冊／(5冊中)
T		1	8	-	-	-	2冊／(5冊中)
U					-	-	0冊／(2冊中)
V					4	-	1冊／(2冊中)
W					2	4	2冊／(2冊中)
X					8	1	2冊／(2冊中)
Y						24	1冊／(1冊中)
Z						7	1冊／(1冊中)
思想	0	1	27	35	7	19	



※〈表4〉の表記について。

(取材)とは、新聞社・雑誌社・本のライターや出版社などからによる“取材”という視線が投げかけられ記事になったものを指す。(情報提供)とは新聞社による“イベント情報”として記事になったものを指す。(学術)とは学問として取り上げられたものを指す。「HP」とはインターネット上のホームページを指す。

